



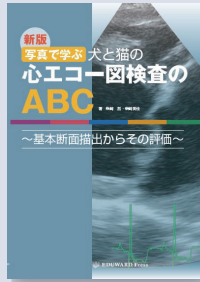
大森啓太郎

東京農工大学大学院 農学研究院動物生命科学部門 准教授  
農学部共同獣医学科 博士(獣医学)  
アジア獣医内科学専門医(内科)

飼い主の切実な想いと命の重みが  
学びを深め、技量を磨き続ける原動力に

# Recommend

## 大森啓太郎 先生が薦める、この4冊



新版 写真で学ぶ 犬と猫の  
心エコー図検査のABC  
～基本断面描出からその評価～

著者：福島隆治  
A4判 並製 384頁

定価：22,000円(税込)のところ  
キャンペーン価格 19,800円(税込)



198号  
(2022年1月号)

大森先生ご執筆号

CLINIC NOTE

鑑別診断プラクティス  
～臨床医を育てる全科ラウンド～  
第1ラウンド：下痢・便秘

獣医学の“標準診療”を学ぶ総合情報誌 月刊 A4判 116頁

定価：3,353円(税込)のところ  
キャンペーン価格 3,018円(税込)



131号  
(2021年2月号)

大森先生ご執筆号

S&A Medicine

診断に導く思考戦略  
～第一線ではどう考える?～Vol.1 嘔吐  
小動物内科専門誌 隔月刊 A4判 96頁

定価：4,505円(税込)のところ  
キャンペーン価格 4,055円(税込)

※これらの商品は  
キャンペーン対象外となります。

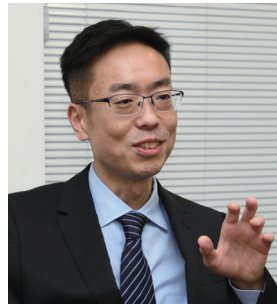


腹部エコー検査  
パーフェクトガイド  
のどの奥から腹の底まで

著者：福島隆治 A4判 並製 384頁  
定価：20,900円(税込)

### Information

- 大森先生の本インタビューは、Eduward Mediaサイトからお読みいただけます。詳しくは<https://media.eduone.jp/>にてご確認ください。
- 大森先生からお勧めいただいた書籍が、期間限定にてお安くお買い求めいただけるキャンペーンを実施中(キャンペーンお申込期限:2022年5月末日まで)。詳しくは<https://eduward.online> もしくは専用チラシをご覧ください。



大森啓太郎  
Keitaro Ohmori

東京農工大学大学院 農学研究院動物生命科学部門 准教授  
農学部共同獣医学科 博士(獣医学)  
アジア獣医内科学専門医(内科)

### 経歴

- 2002年 日本大学生物資源科学部獣医学科 卒業
- 2004～2006年 日本学術振興会特別研究員
- 2006年 東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻 博士課程修了
- 2006～2007年 National Jewish Medical and Research Center, University of Colorado Health Science Center, Research Fellow
- 2007～2012年 東京農工大学大学院共生科学技術研究院 助教
- 2012～2020年 東京農工大学大学院農学研究院 講師
- 2020年～ 東京農工大学大学院農学研究院 准教授



EDUWARD Press

〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14サカヤビル2階  
tel. ☎ 0120-80-1906 fax. ☎ 0120-80-1872  
<https://eduward.online>

DM : 70001834

飼い主の切実な想いと命の重みが  
学びを深め、技量を磨き続ける原動力に

## 「尖ったナイフ」だった学生時代と臨床への興味

—大森先生が獣医療の道に進まれたきっかけを教えてください。

中学、高校の頃は獣医師になろうという気持ちは全くなかったのですが、進路の方向性として漠然と考えていたのは理系でした。特に生物学に興味があり、消去法的に獣医学科を選んだんだと思います。亀や水生生物がわりと好きだったのもありますし、それに実は私、気持ち悪い生き物に心惹かれる癖（へき）があって（笑）。大学でも寄生虫を研究対象とする医動物学研究室に所属。学部生時代の休み時間は寄生虫関連の書籍を図書館で読みあさっていました。今思えば、ちょっと変わった学生でしたね（笑）。また、自省を込めて振り返れば、自分の正しさだけを鋭く人に突きつける「尖ったナイフ」のような学生だったとも思います。だから、指導教官も扱いに困ったのかもかもしれません。大学5年生のある日、水戸市で開業されている同級生の方の病院に1か月間、実習に行くことを勧められたんです。

—実習生活がその後の進路に影響したのでしょうか。

はい。一次診療のリアルな現場に触れられたのは大きな刺激でした。例えば、院長先生は痒みを主訴に来院した犬が脱毛した皮膚を舐め続ける様子を見て、「ホットスポットだね」とすぐ判断し、ステロイドを打つ。次の日の再診ではかなりよくなって、飼い主さんが喜ぶというような……。「こうやって自分が学んだ知識が社会に役立つんだ」と衝撃を受け、臨床に進みたいと考えるようになりました。

## 人の温かさや命の重みに気づき、「内科医」が天職に

—大学院は東京大学の獣医学専攻の博士課程に進んで獣医免疫学を修め、その後はアメリカのコロラド大学附属研究機関に留学されたとか。海外での研究生活はいかがでしたか。

自分自身の在り方を見つめ直す大事な転機になったと思っています。先ほどもお話ししたように、僕は「尖ったナイフ」のような性格の学生で、さらに研究でも成果を出すのが早いほうでしたから、天狗になりかけている部分があったと思うんです。でも、実際にアメリカに来てみると簡単だと思っていた英会話に通じないし、相手の言葉も聞き取れない。打ちひしがれる日々の中、コロラドで出会った方々の温かさ、優しさに戸惑いさえ感じ、「自分はナイフのように人を傷つけるサイテーな人間なのに。なぜ、こんなに温かい愛情を注いでくれるのだろうか?」と白問白答を繰り返していました。人の温かさや自分の至らなさに気づける機会を20代のうちに得られたのはすごくありがたかったと思っています。



—コロラドではヒトの免疫学の研究に携わっておられたそうですね。そこから日本の獣医療、しかも臨床内科医の道になぜ戻られたのでしょうか。

研究も順調で契約を更新するつもりだったのですが、たまたまビザの更新のために帰国したとき、東京農工大学から助教のお誘いのメールをいただきました。非常に悩んだのですが、「やはり自分は日本人なのだから、日本のために自分の能力を捧げたい」と思い至り、帰国しました。しかし、臨床の研究室に進んだのは偶然で、当時はまだ今のように「内科医が天職だ」と思っていたわけではなかったんです。

—では、内科医としてのモチベーションを高めるような重要な転機がもう一度あったのでしょうか。

2009年に長男が早産で生まれたとき、NICU（新生児集中治療室）の先生が親身になって診療してくださった経験が大きく影響していると思います。そのときの長男は白血球の数値とCRPが異常に高く、肺のX線写真も真っ白。親としては不安でたまらなかったのですが、その若手の先生が寝る間も惜しんで、ほかの大学の先生方ともやりとりしながら本当に熱心に原因を探り、丁寧に状況を説明してくださって……。その先生の真摯な姿にもすごく心を打たれたんです。「自分が見ているこの先生の姿は、動物の飼い主さんから見た自分の姿と同じなんだ」、「命を預かる以上、身を捧げる覚悟で本気にならなきゃいけない」。こう明確に意識するようになりました。

—アジア獣医内科学専門医の資格取得を目指されたのも、そうした経験が影響しているのでしょうか。

はい。資格を取得した後も、「専門医はその分野に精通し、しかも常に情報をアップデートし続けなければ社会に貢献できない」という意識が、学び続けるモチベーションになっています。特に今の獣医療の進化のスピードはすさまじく速いですからね。自分の学びを止めれば、それは世の中の流れから後退してしまうことだと思っています。

## 発展途上の獣医療、貪欲な学びこそが道を拓く

—常に新しいことを学び続ける大森先生にぜひお伺いしたいのが、先生の学びの方法です。どのような方法で学んでおられるのでしょうか。

最近特に注目しているのはSNSです。SNS上ではさまざまな方が獣医療の論文を紹介されているのですが、アブストラクトを読むより分かりやすいですし、重要キーワードにハッシュタグがつけられているので、情報収集・発信が非常に効率的に行えます。ただし、紙ベースの情報を軽視してはなりません。先端情報を知るために論文はよく読みますし、ジェネラルな情報を知りたいときは成書も読みます。雑誌も深く広く知るにはとても有用で、学生時代から愛読してきたSA Medicineは今もずっと読み続けています。

—近年の臨床現場の変化の方向性については、どう感じになっていますか。

飼い主さんの想いが、どんどん「重く」なっていますよね。私が所属する二次診療の病院の世界だけでみても、「できる限りの検査を行って診断をつけ、できる限りの治療を施したい」と願う飼い主さんがかなり増え、1頭あたりの診療費も上昇傾向にあると思います。そうした飼い主さんの切実な願いに応えられるよう、我々獣医師は知識や技術を常にアップデートし続けなければならないと思いますし、卒後教育を充実させて人医学領域のシステムに近い形に進化させていかねばならないと考えています。

—では最後に、第一線で働く獣医師の皆さんに向けてのエールをお願いします。

現場で働く人を大事にすること、そしてワークライフバランスを充実させることが重要だと思います。その一方で、貪欲に学び続けることの大事さも忘れないでほしい。「これは自分の専門外だからやらない」と縮こまってしまうのではなく、興味をもったことをどんどん勉強していく人にこそ、新たな未来が拓かれていくのだと思います。

特に一次診療の現場は、内科も外科もありません。「異種格闘技戦」によくたとえるのですが、ジャンルにこだわらずにさまざまな知識と技術を磨く必要がありますし、そうして動物の命を助けられるということが、実は臨床獣医師として一番、充実感が得られる部分だと思っています。